



7

「新国立競技場」

「市民運動」はNIMBY運動となりがちです。産廃処理等の迷惑施設は「Not in my backyard」ウチの裏庭にはご免だよ」の意識。日頃は声高に「国家」を語る向きも、

へと昇華しました。「週刊文春」が同年六月四日号で四ページに亘って掲載した「住民の住民による共産党のためでも社民党のためでもない田中康夫の新『住民投票』論」の中で、僕は述べています。

新幹線も高速道路も整備され、二つの空港も至近に位置する神戸市の沖合に、埋立費用のみでも三千億円、総工費一兆円を要する市営空港建設は、震災で家族や住居を失い、二重ローンに苦しむ市民の理解を得られぬ不要無用な公共事業ではあるまいかと。

それでも国際港湾都市KOBÉに空港が必要なら、原野が広がる六甲山裏側の中国道と山陽道の分岐点付近を選択すれば、空陸連動で24時間稼働の物流空港が五百億円程度で竣工可能。にも拘らず巨額な起債を伴う海上空港に固執するのは、三兆円近い地方債の償還に窮する「株式会社・神戸市」の自転車操業の隠蔽に他ならぬと。

自宅から程近き場所での計画には同様の反応を示すでしょう。
阪神・淡路大震災後の一九八八年、神戸空港建設を疑問視する動きは脱NIMBYのムーブメント

空港建設の是非を問う住民投票を求める有権者の住所・氏名・性別・生年月日・捺印の自筆署名は選管認定で三十万筆を超えました。市長選投票率が常に三割台の神戸の奇跡。が、市議会は否決します。

その後、桂米朝・陳舜臣・三枝成彰の三氏と共に呼び掛け、計画中止を求める意見広告を翌年六月二十五日付「朝日新聞」に掲載しました。磯崎新、大前研一、大宅映子、観世榮夫、黒柳徹子、三遊亭圓歌、椎名誠、田崎真也、田原総一郎、宮台真司、代々木忠とイデオロギーを超えた三百五十名の「ユニテッド・インディヴィジュアルズ」な各氏の賛同は、事業が一旦立案されるや梃子でもUターンしない行政や政治の宿痾に対する懸念の表れです。

日本建築家協会HPに掲載された「新国立競技場案を神宮外苑の歴史的文脈の中で考える」と題する建築家・榎文彦氏の論考が急激な勢いで人口に膾炙しているのも、「日本を変えたい、と思う。新しい日本をつくりたい、と思う。もう一度、上を向いて生きる国に。」と謳う新国立競技場の惹句に賛同すればこそその懸念でしょう。

東京都風致地区指定第一号の神宮外苑一帯の高さ規制を十五mから七十五mへと五倍も緩和し、ロンドン五輪メーンスタジアムより三倍も広い床面積の競技場を、ロンドンの七割に満たぬ敷地面積に

出現させるのは、「市民社会を経験する事なく一足飛びに近代社会に突入」し、「封建社会の武士が構成したお上」に代わって官僚の支配するお上」が跳梁跋扈の日本を象徴すると看破します。

総事業費千三百億円には現競技場の撤去費も設計監理料も含まれていません。而して絵画館前のイチョウ並木の景観を一変させる新国立競技場は、イラク出身の女流建築家ザハ・ハデイドの作品。流体力学的なデザインを二十世紀末から売り物とし続ける彼女は、豈に図らんや数十もの同様のプロジェクトを中国で進行中なのです。

東京と同じ八万人収容のスタジアムの四割を恒久施設に、残り六割部分を会期十七日間の仮設構造とする事でIOCも納得したロンドンの智慧に今からでも学ぶべきと榎氏は提案します。

数十年に亘る維持管理で生じる莫大な光熱費、人件費を賄う収入予測も明らかにせねば、将来世代に加重な税負担を押し付ける結果を招きます。持続可能な超少子・超高齢社会ニッポンとは何か！これぞ不毛な二項対立を超えた真つ当な具体的提案だと考えます。

★次号12月号の発行日は11月29日(第5金曜日)です。